B 150　東北の刺しものの研究

2　手覆い（手甲，手袋　腕貫）の刺し模様について

山形県立米沢女短大　　徳永幾久

目的　東北の刺しものの模様は概念としてぼろ刺しであり　補強のためといわれているが　収集物をみると　それのみでなく　厄よけ，生活安定，富貴に対する祈願，生産物に対する豊穣祈願など，それなりの意味のあることがわかる。また東北の原住民といわれたアイヌ文もみられ　文化変容も考えられるのである。そこで本報では　その中から　特色ある手覆いの刺し模様についてのその存在の意味について報告する。

方法　東北地方に残存する　刺しものを全般的に収集し、それらの傾向と手覆いの刺し模様と比較すると共に　アイヌ文様とも比較検討し考察した。

結果　手覆いの刺し模様は，機能の保護　補助，厄よけ，念願達成，豊作祈願などの他に　当時交流のあったアイヌ文化等の影響を受け、異質文化を受容することが装飾であるという意味づけもあったと考えられ、模様は多様である。特に　明治後期から庶民が木綿を使うようになってから、女の手仕事を象徴する手にまとうこれらの被物は　最少限の布地を利用し，仕事に適応した構成と　その人なりの　刺しの意味を造形的に刺しこんだのである。　刺し技法は〔1〕作業時の筋肉の伸縮方向に縫い刺しをし補強を意図したもの〔2〕厄よけ　祈願を主とし　仏く手と身上安泰を願い　その意味づけの模様を刺したもの〔3〕舶来文化受容と同じ意味でアイヌ文様を刺したもの等である。即ち　心身の守護的役割と装飾的役割である。これらの刺し模様をみると　それ故に　手先の仕事をする女を装う手覆いは　端布であっても　自らのちえを絞って　自由に　独自のものを作りあげたのだと考えるのである。